

問題が生まれ、それへの対応が、また新たな方法を生み出す、というサイクルがこのところ間断なく反復され、なかなか全体をまとめられずにいる。しかし、この経過の中で、3相データの因子分析モデルと、いわゆる複合変量の構成という異質な起源をもつ方法を、ともかくも1つの論理的フレームワークの中で統一的に論ずる準備ができたと思われる。

これらの方法が、どのように評価されていくかは今後の問題だが、この間の一連の活動を通じて、私自身のうちに、心理測定と多変量解析モデルに関する、ある種のセンスは確実に養われたと信じている。この方はさしあたり直接的な形に表れるものではないが、より重要な成果であったと思う。

2. 外国人の日本語能力試験

昨年とほぼ同様の分析と、報告書の作成をおこなったが、報告書は本年も非公開である。いろいろな意味での活動は、ますます活発化しており、その点でも忙しさに拍車をかけられている感じだが、その内容はまだここには記さない方が無難のようだ。

1つだけ、これに関連して、3月末から4月の始めに

かけての約2週間、国際交流基金の派遣により、インドネシアとオーストラリアを訪問し、現地の日本語教育関係者と意見交換をする機会があったことだけは書いておこう。このことを通じて、昨年も述べたようにこのテストの問題の少なくとも一部は異文化接觸の問題であること、換言すれば、教育測定が文化的に中立ではあり得ないことを再確認することになった。これについては、ある程度詳しい報告書を現在準備中である。

3. その他

久世敏雄氏との共同執筆による、「縦断的研究による青年期の展望 西平直喜・久世敏雄（編）青年心理学ハンドブック 福村出版」が間もなく出版される。また、「主要都市間における地域間価格差に関する調査報告書 愛知県」の一部と「土岐市の若者意識調査 土岐市」を執筆した。

以上1～3を通じて、単なる技術の集積でない、認識のための枠組みとしての、あるいは（やや大袈裟だが）1つの文化としての心理測定論が見えてきつつあるのが現状である、とここには書いておこう。

研究経過報告

池田博和

1. 青年期の病理と心理臨床

しばらく以前から登校拒否の研究会を開いて、断続的に事例検討を行ってきたが、今年度の紀要にその活動の第一報告として「最近の来談者の諸傾向についての調査」をまとめることができた。

登校拒否問題は病理論的にも治療論的にも実際まだ、依然としてアポリアであり続けているのであり、今回は何らかの心理療法的展開を模索する意味で、われわれ共同研究者の担当したケース全体の一般的傾向を眺めてみたのであるが、その結果、初めに漠然と抱いていた予感のようなものをかなりはっきりさせることができたと思う。

その具体的な内容は論文に示した通りであるが、この研究に取り組んだ意義は何よりも、新たな知見や結果を発見したということよりも、われわれにとっての今後の展開方向が明確化されたという点に存している。この意味では、まだわれわれはスタート点に立ったにすぎない

けれども、数量的検討では必ずしもクリアーカットにできなかったこのような仮説的な示唆に関して今後、事例研究の方法を中心とした検証作業に努力していきたいと思う。

それにしても、今回は共同研究者全員がそれぞれのもっとも得意とする、あるいはできるかぎり精一杯の、接近の仕方で協力しあえたいかにも共同研究らしい研究であったという点で、楽しい仕事であった。

こうしてこの登校拒否問題を明らかにできるなら、これまで筆者が取り組んできた「青年期の病理と心理療法論」に関するひとつの体系化にとっての重要な一角を構成しうることになるのである。

2. 学生相談

これも上の青年期問題に属することはあるが、とくに学生相談の領域に限っていえば、本年早々の「第20回学生相談研究会議」でスチューデント・アパシィのケー

スを提起し、その心理と援助の方法についての検討を加えた。そこで強調したのは、青年期危機の本質的存在様態を「生成の停滞」ということのうちにみるということであった。つまり「<時間がたつ>ということは<私が生き続けている>ということにはかならず、時間と自己とは不可分の同一事態……であるから、自己の自己性が不確かなものになるということは、そのまま時間的存在様式が崩れることを意味する。すなわち……この<生成>が不成立になり、一言にして<停滞>のうちに陥ることになる。……アパシィもやせ症も強迫症もうつ状態も自殺企図もこの<生成の停滞>の表現形式の相違にすぎない……このことの徹底的な理解のうちに重要な治療的契機が存している」という視点である。(『第20回学生相談研究会議、学生相談香川シンポジウム報告書』 p 66-74, 香川大学)

3. 心理学の方法としての現象学

この主題に関しては、昨年著した「人間性心理学への道——現象学からの提言——」(村上英治編, 誠信書房, 1986) の中の序章と終章においてある程度明らかにしたと思う。

筆者の現象学との本格的な出会いは大学3年の時であるから、すでに20年以上も前のことになるけれども、それは私にとって非常に重要なひとつの原点ともなるものであった。しかしながら、心理学において現象学の方法といえば、ともすればいかにも「アメリカン」といった感じで、孫引き、ひい孫引きの希薄化され甘ったるいだけの人間中心主義でしかなかったような傾向に対して、私はいつかきちんとした形で本来の源泉からたどって直接に心理学の方法論としての道筋を跡づけたいと考えていた。この前々からの課題を今回一応ようやく果たしたとはいえ、決して十分なものではなく、ことに具体的な主題に即した各論的な展開として書きたいことはたくさんあったが、時間と紙数の制限の前に十分煮詰まらないまま、筆をおかねばならなかつた。それが最後の章のタイトルを「人間性心理学の体系化にむけて」と題さざるをえなかつた理由である。今後、これらの各論的なものをひとつひとつまとめていきたいと思っているが、その際、現象学用語を用いないで、どれだけ日常的な言葉でこの独特な方法論的思想を表現しうるかがひとつの挑戦となるであろう。